

# 実験場

主人公の「浦島さん」になった観客はゴーグルをかぶりスクリーンの前に立つ。そこにはバーチャルリアリティ(仮想現実)の世界が広がっている。近辺でいじめるカメならぬ「ワサギさん」、乙姫様の「ミユエ」、いじめっ子の「ギャング」...

「浦島太郎」と、英国の作家ルイス・キャロルが描く「不思議の国のアリス」とともに読み手を時間旅行に誘う魅力的な物語だ。優れた作品がそうであるように、二つの物語は夢と現実、タマシを破る誘惑と不安なインタラクティブな制限をなくかきたる。もし、作品の登場人物たちに会えた

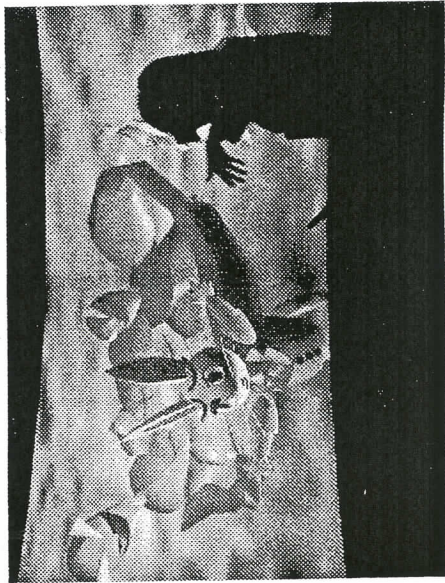
「電宮城」に見立てた「電子フェロモン」城が登場。背景で音楽が流れ出す。〈ある惑星にワサギが落ちてきてギャングにいじめられている〉写真。さて、浦島さん(観客)はどうする。①思わず「やめろ」と画面に向かって叫ぶ。〈ワサギさんはおれに電子フェロモン城に招待してミユエが現れる...〉。②いじめを黙認したり「もつとやれ!」とおぼろしくいじめは続き、しまいにはワサギさんは死ぬ。その聲がギャングに響き、浦島さんを責める... (画面は)再びワサギの落下シーンへ。

## 芸術と科学が融合、新たな表現に

土佐尚子・中津良平さんの「ワンダーランド」

### 仮想現実

理可能なインタラクティブ(双方向芸術)の一つだ。高度な科学技術を使ったアートはアートといえるか。そんな疑問も生まれるかもしれない。ちまたで写実的な描法で女性の官能美を追った



この映画では、人画家、アングルが19世紀の写真の出現に、芸術を冒とくするものたとして禁止を求める。そので、土佐さんと中津社長の波長はここで重なったのだろう。絵画、彫刻、演劇などさまざまなアートに挑んだ土

らどんなに楽しんでも。そんな思いを現実化しているところがある。京都府相楽郡精華町の「エイ・ティ・アール知能映像通信研究所」。メテアアーティスト、土佐尚子さんと中津良平・同研究所社長が、そこで共同制作した近未来映画「ワンダーランド」が、彼らに近づく魔法の扉だ。

佐さんは「作品が自立して観客に対応でき、それが作者にもフィードバックしてくるような温かいコミュニケーション媒体となる作品を作りたい。潜在意識を視覚化したい」と言い換えてもいじめる。「それをかなえるのが電子テクノロジーを利用したメテアアートなのです」

10年前、NTT横須賀電気通信研究所にいたとき、中津社長は人の声をコンピュータが認識するシステムを完成させた。デモンストレーションを兼ねて上司に講演しようとしたとき、システムが動かなかったことがある。緊張した声の微妙な抑揚まで識別できなかったのです。人間のコミュニケーションは感情、表情などありまじなものできり立っていることをそのとき痛感しました。それからは感性を領域にするアーティストに関心を持った。

絵画と写真のどっちの道をみれば、どちらが衰えたわけでもない。写真は映画への道を開いたし、絵画に写真を取り入れたアートもある。アートとテクノロジーは一方をのみ込むのではなく、地層のように交わりながら新しい表現を生み出していい。「ワンダーランド」はそんな試みでもある。(次回掲載は6月7日)

◆エイ・ティ・アール知能映像通信研究所 国際電気通信基礎技術研究所(ATR)の中の研究部門で、1995年3月設立。コンピュータ、映像、音などマルチメディアを使い「21世紀の新しいコミュニケーション」をテーマに異なる時間・場所の環境を再現したり、絵画のちまたを仮想的な空間で創出。感性を重視したコンピュータと人のコミュニケーションなどを技術開発している。研究員は約50人。☎0774-95-1401。